慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	C. H. クーリーにおける「個人と社会」：その論理構造の解明のうえに
Sub Title	Against the misunderstanding of C. H. Cooley's social theories
Author	岡田, 真(Okada, Makoto)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1964
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.3 (1964.) ,p.57- 67
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000003-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

C. H. クーリーにおける「個人と社会」

―― その論理構造の解明のうえに ――

Against the Misunderstanding of C. H. Cooley's Social Theories

岡　田　　真

Makoto Okada

(1)　問題の所在
(2)　クーリーの論理構造Ⅰ　社会の実体
(3)　クーリーの論理構造Ⅱ　現実との関係
(4)　社会の変革と "free discipline"
(5)　クーリーはなぜ誤解されるのか

(1)

教育関係者のあいだで，最近研究されているテーマのひとつに，グループ学習の問題がある。この問題に関する議論は，ソビエト教育学の集団主義の立場から展開される場合と，アメリカ社会学の小集団研究をもとにして展開される場合とに大別されるであろう。

後者の立場からグループ学習が論ぜられるとき，チャールズ・H・クーリー (Charles H. Cooley) の小集団研究がひきあいにだされることがある。クーリーが米国教育社会学史上に占める位置は[1]，この小論で改めて指摘するまでもない。

しかし，クーリーの理論は，正しくその継承者に理解されているであろうか。必ずしもそうではないように筆者には思われる。

ときによると，彼の理論は，あたかも，いわゆる社会実在論の一種であったかのように解釈されていることがある[2]。今日では，彼が社会実在論と社会名目論との対立を止揚したものであるということは，広く認められている。それにもかかわらず彼の理論の内容が，事実上，社会実在論であるかのように解釈されることがあるのは，なぜであろうか。その原因は，ひとつには，彼による実在論と名目論との対立の止揚が，どのようにして行なわれたかが，彼の論理に即して解明されることがすくないため，彼の個々の発言が，その論理から離れて，彼の考えかたとは似てもにつかぬ「理論」にまとめあげられてしまうことも可能だからではないであろうか。

あるいはまた，クーリーの用語の幾つかが，彼の理論とは無関係に使用されていることもある。すなわち，ある用語――たとえば primary groups など――が，クーリーの論理構造のうえでどのような位置にあらわれてきたのかを無視しながら，なおその用語にクーリーの名を冠して使用している者もある。さらに，このようなクーリー「継承」者の極端な例には，後に示すように，クーリーが特定社会だけについて展開した論理の妥当範囲を，拡大してあらゆる社会にあてはめようとする者さえある。

そして，本稿で最後に示すように，クーリー理論の実在論化と，クーリーの論理構造の無視とは，たがいに無関係ではないのである。

クーリーが実在論者であったかどうかは，教育の実践にとって，一見，無縁の問題であるかのような感がある。しかし，グループ学習を教育の現場で試みるときなどに，まず直面する問題のなかには，個々の生徒・児童とグループ全体との関係を，どう処理すべきかの問題がある。わが国で社会科が発足したときにも，この，個と全との対立は関係者の頭をなやませた問題のひとつであって，初期の社会科指導要領の執筆者の一人は，自分の著作のなかで，「窮極には教育の成果は個人的に焦点づけられ，その効果は個人に引きしぼられて考察されなければならない」にもかかわらず，当時の社会科の「実際の学習形態をみると，ほとんど個人が集団の中に埋没して，集団のめあてやしごとを達成するために，個人はも

っぱら集団に奉仕しているようにみえる。こうしたくい違いはあってよいものなのか，またあってさしつかえないとすると，両者の関係をわれわれはどう理解すればよいのであろうか」[3]，と，問題を提起しているほどである。

このような問題提起がされていることをみても分かるように，個と全との関係についての諸学説は，教育の現場での実践と無関係ではない。そして，実在論的に解釈されたクーリーのことばは，個の全に対する絶対的服従を主張する者にとっての，恰好の理論的裏づけを提供しているのである。

しかし，本稿で以下に示すように，クーリーは実在論者ではない。彼は実在論と名目論との対立を止揚したものなのであった。本稿では，その止揚が，どのように行なわれたかについて，彼の論理をたどりながら検討を加えてみると同時に，さらにまた，そのクーリーの理論が，なぜ実際には実在論的に解釈されることが可能であるのかについて，あわせ考えてみることにしたい。

註

1) 詳しくは，佐々木徹郎「米国社会学と教育」第5章　参照。

2) 筆者の研究するヒューマン・エコロジーの創始者，R.E. パークも，クーリーの理論を社会実在論的に解釈している。すなわち，パークは，人間社会を community と society（両語の意味については，拙稿「Human Ecology における community 概念」三田商学研究 Vol. 5, No. 2 参照）の2側面に分けている。パークによれば，community はデュルケムの扱った世界であり，society がクーリーの扱った世界である（"Introduction to the Science of Sociology," p. 723）。パークには元来，実在論的論調が強いが，society または「クーリー的次元」については特に強く実在論的にその議論を展開している。パークはクーリーの「人間性と社会秩序」第4章を，society における社会的合意（コンセンサス）の推進を説明するために引用するという，不当な試みを行なっている（ibid., pp. 664-5）し，クーリーの looking glass self の理論も，コンセンサス理論のなかにとりいれられてしまっている（ibid., pp. 70-1）。しかし，パークの理解するクーリーの姿は，その本来，の姿を著しくゆがめたものであって，このパークに典型的にみられるようなクーリー理解を批判することこそ，本稿の次節以下の意図するところなのである。

3) 馬場四郎「社会科の学習形態」（村上俊亮・石山脩平編「社会科教育」，pp. 170—172）

（2）

クーリーは，彼の主著「人間性と社会秩序」のなかで，「"社会と個人" は，単に第1章だけでなく，実に本書全体の主題である」[1] とのべているが，同書第1章第1節では，社会は "organic" であると[2] はっきり書いている。しかし，このことは直ちに，クーリーを実在論者とみなす解釈を許すものであろうか。必ずしもそうではない。彼は「孤立せる個人も，また同様に個人を離れた何物かとしての社会も，抽象物であって，経験的には知りえないものである」[3] というが，「孤立せる個人」の経験的存在を認めなかった彼は，同様に，社会をも「個人を離れた何物か」とは考えなかったのである。

有機的ということばは，彼の真意を伝えるには必ずしも適切な表現ではなかったのであるが，この "organic" ということばが，何を意味するかを明らかにするため，彼は5項目の自問自答を試みている[4]。そして，そこにあらわれた彼の見解は，——社会は個人の単なる総和ではなく，組織された個人である，——しかし社会の実体は個人であって，mysterious something else[5] の介在する余地はない——，ということにつきるであろう。

さて，同書の主題は「社会と個人」であるにもかかわらず，索引中この問題に関する項目は，同書の3ヵ所のページを指示しているにすぎない。このことは，同書を開いて，どこか特定の箇所をみればその主題が理解されるものでなく，同書全体の展開のなかに「社会と個人」の問題に対する回答が含まれていることを，意味するものであろう。元来，クーリーの自我論は，ボールドウインの人格発達弁証法などを基にふまえているのであるから[6]，クーリー理論を真に理解するためには，彼ら特有の弁証法を前提として，その1ページの議論をも，全体との関連のもとに学ばなければならないであろう。すなわち，第1章は後の議論の基礎として第2章よりも先行し，同様に，第2章は第3章よりも先行しているわけである。「人間性と社会秩序」の章別についていえば，第1章（Society and the Individual）から第5章（The Social Self—1, The Meaning of "I"）までが社会の実体を考察するものであり，第6章（The Social Self—2, Various Phases of "I"）以後の各章が，その実体の現象する諸形態を論じているように思われる。そして，社会本質論は，実体論と形態論の展開の過程で示されているようである。ただし序章（Hereadity and Instinct）だけは，再版に際し加筆されたものであって，全体の構成からやや独自性を有している。

では，このように組織された各章を，個々について検討してみることにしよう。まず第1章において，同書全体の主題が，「社会と個人」（第1章の標題でもある）の

問題として設定される。そしてさきに言及した5項目の自問自答も，この章に含まれているのであった。

第2章に至って，同書の対象とする「社会と個人」が，suggestionとchoice とによって動かされる社会と個人の関係に限定される。両用語について彼は，「Suggestion の語は比較的に機械的・反射的に作用する影響力を示すために用いられる。より高度の選択的な意志活動は choice または will という」[7] と説明しているが，suggestion と choice とは，ともに人間行動の（社会）心理的側面の原則であって，人間行動の他の側面，たとえば経済的側面までも，この suggestion and choice だけから説明しつくすことはできないであろう。しかし，社会の1側面だけを抽象して議論を展開することは可能である。クーリーが，第2章に "Suggestion and Choice" を置いたことによって，本書のその後の展開は，人間行動の suggestion and choice によって動かされる側面に限定されることになる。（経済的側面が捨象される点に注意）。

続く3章と4章は，個人が他の人間に対していだく感情についての論述にあてられているが，第3章では必ずしも，その感情をいだく人間の面前に，感情をいだかれる人間が，実際にたちあらわれる必要はない。個人の感情に関する限りでは，「実在の人間と想像上の人間との間に何らの差異もない」[8] のであり，「thought と intercourse との間にも差異はない」[9] のである。第3章では，「われわれがある人を念頭に置くときに思いうかべるもの」は「問題の人の image」[10] であり，これこそが「直接的社会関係の研究に関する限り」「現実の人間」(the real man) であると説明される[11]。

この「問題の人の image」を彼は personal idea と呼んでいるから，以下それを PI の記号であらわそう。正確を期するために，人間 B が人間 A についていだく PI を $PI_{B\to A}$ と記すことにする。B が $A, C, \cdots N$ までの人間に関して PI をいだくとすれば，各 PI はそれぞれ

$$PI_{B\to A},\ PI_{B\to C},\quad \cdots\quad PI_{B\to N} \qquad \cdots[1]$$

とあらわされることになる。なお，この章は「実在の人間と想像上の人間との間に何らの差異もない」という前提の下にあるから，$PI_{B\to A}\cdots\cdots PI_{B\to N}$ は，実在の人間に関するものであっても，また想像上のものであってもよいわけである。

PI には，目鼻立ちに関するものから，人格的特性に至るまでの，種々の深度のものが存在しうる。ことに，実在の人間に関する PI は，接触によって深度をふかめる場合もあり，クーリーも，第4章では，「intercourse による personal ideas の成長とは，…他人の心に入りこみ，その心を分有する力が増大することである」[12] としている。もし，図式〔1〕における A がたまたま実在の人間であるとすれば，B は $PI_{B\to A}$ を深めて，A に対して sympathy を示すことができる。このようにして，B が A に sympathy を示すことを

$$B\ (PI_{B\to A})\cdots\cdots\to A$$

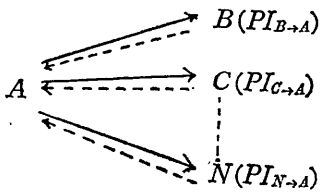
とあらわすことにしよう。同様に，$C, D, \cdots\cdots N$ の各個人も A に対して sympathy を示すことができる。その各個人が示す sympathy は，それぞれ

$$\begin{array}{l} C\ (PI_{C\to A})\cdots\cdots\to A \\ D\ (PI_{D\to A})\cdots\cdots\to A \\ \vdots \qquad\qquad\quad \vdots \\ N\ (PI_{N\to A})\cdots\cdots\to A \end{array} \qquad \cdots[2]$$

とあらわされるが，このそれぞれの sympathy は，この段階では，まだ，たがいに並行して A にむけられているのに留まる。この場合，$B\cdots N$ の示す sympathy によって，直ちに A と彼らとの間に現実の人間関係が生ずるとは限らない。なぜならば，俗にいう「片思い」に終ることもありうるからである。（sympathy が現実の人間関係に発展するためには，相手に converse される内容が，"sentiment or thought"[13] とクーリーのいうものである必要がある。しかし本稿ではこの点に関する詳述を避けよう。）

さて，個人が PI をいだくことは，実在の人間に対しても，想像上の人間に対しても可能であった。しかし，A にとっては，$B, C, \cdots\cdots N$ の諸個人から PI をいだかれ，sympathy を示されているということは，現実のできごとなのである。第5章に至るとクーリーは，その扱う「社会的自我」は「経験的自我」[14] であると発言するが，この経験的自我とは，もはや PI のようにある人の心に秘められたものでなく，「日常の観察によって理解し確認しうる自我」，すなわち，実在の人と人との関係によって裏づけられた自我を意味するものなのである。

第4章までは，PI をいだく人間（$B\cdots\cdots N$）を中心に論述がすすめられてきた。第5章では，論述の中心が，PI をいだかれる人間（A）に移行する。A には，自分に対して，他の諸個人がどのような PI をいだいているかについて，注意を払いながら行動をとる場合が生じてくる。つまり



…〔3〕

となる。さて，この図式〔2〕から〔3〕への移行は，質的な変化を含んでいる。$B \cdots N$ の諸個人は，図式〔2〕の左辺に置かれている限りでは，個人の単なる集合に過ぎなかった。それが図式〔3〕で右辺に置かれるや，単なる個人の集合以上のもの，つまり，左辺の A の行動にとって規準となるものに転化する。

クーリーは，この $PI_{B\to A} \cdots\cdots PI_{N\to A}$ の総体を，A の self looking glass (以下 *SLG* と略記) となづけ，A のいだく self feeling (以下 *SF* と略記) を looding-glass self[15] と呼んでいる。以上の展開によれば，——社会の心理的側面の，もっとも primary な形態としての *SLG* は，A にとっては，単なる個人の総和以上のものとしての意味をもつ。しかし，その実体はあくまでも諸個人であって，*SLG* そのものが，ひとつの実体をもつわけではない，——ということになる。

以下，「人間性と社会秩序」の諸章は，*SF* に関する記述 (6, 7 章) と，人間の *SLG* に対する働きかけに関する記述 (8, 9 章) とに捧げられている。もちろんその展開の間に，現在の学問水準からは不正確とされるような古い術語が用いられているところや，その意図を伝えるにはむしろ障害となるべき表現がとられているところ，附随的説明が論理の大筋を理解し難くしてしまったところなどもある。しかし，それは彼の論理の骨子がもつ意義を失なわしめるものではない。

クーリーが「人間性と社会秩序」の第 4 章から第 5 章に移る際に，議論の中心を B から A に変えているのは，意味のないことではなく，彼の論理の展開にともなうものであって，それを図解すれば，図式〔2〕から〔3〕への移行ということになる。そして，図式〔2〕は，再びくりかえすまでもなく，社会の実体は諸個人以外の何ものでもないということを示すものであり，図式〔3〕は，しかしその諸個人は，組織された諸個人であり，その組織された諸個人の機能は，各個人の機能の単なる総和以上のものであるということを，示している。

このように，図式〔2〕から〔3〕への展開によってこそ，クーリーは，社会実在論と社会名目論との対立の止揚に成功したのであって，この論理展開を無視しては，彼の「個人と社会」に関する見解を語ることができない，と言っても過言ではないであろう。

註

1) Charles H. Cooley, "Human Nature and the Social Order," 再版, p. 35.
2) ibid., p. 36.
3) ibid., p. 36.
4) ibid., pp. 47—50. (この自問自答は，佐原六郎，「社会心理学」, pp. 118—9. に要約されている。)
5) Cooley, op. cit., p. 48.
6) 佐原, op. cit., pp. 114—5.
7) Cooley, op. cit., p. 51.
8) ibid., pp. 88—92.
9) ibid., pp. 92—97.
10) ibid., p. 104.
11) ibid., p. 118.
12) ibid., p. 136.
13) ibid., pp. 136—139.
14) ibid., p. 168.
15) "In a very large and interesting class of cases the social reference takes the form of a somewhat definite imagination of how one's self—that is any idea he appropriate—appears in a particular mind, and the kind of self-feeling one has is determined by the attitude toward this attributed to that other mind. A social self of this sort might be called the reflected or looking-glass self." (*SF* の定義)。ibid., pp. 183—184.

(3)

PI から *SLG* に至るまでのクーリーの理論展開が，単なる観念の遊戯ではなく，現実に基盤を有すること，それは著しく抽象の度の高い議論であると同時に，条件を整えることさえできれば，現実の contacts から例証を求めうるものであることを，本節では示したい。

例証のデータは，昭和33年 3 月に慶応義塾幼稚舎 6 年 E 組を卒業した諸君から得られた[1]。すでに指摘したように，クーリーの議論は社会の一面を対象とするものであって，社会の経済的側面は捨象されている。そのクーリーがとりあげた心理的側面が，経済的側面から相対的独自性を有することは認められるにしても，現実に存在するほとんどの contacts においては，両側面は密接な結びつきをもって現われているのが常である。しかし，幼稚舎生の場合には，中，高学年になっても，経済的人間関係をほとんど経験しない者が多く，その行動にも，経済的動機を認め難いことが少くない。したがって幼稚

舎は，クーリーの理論を検討するために，比較的よく整備された条件を提供してくれるのである。

幼稚舎の中，高学年にこのような条件が存在するかどうかの検討は，E組の調査を開始する直前に，同学年のK組について行なった[2]。

さて，E組に属する任意の1人に，B君がある[3]。彼は「鼻」と題し，次のような作文を書いたことがある[4]。

電車の中で，たいくつなとき，いろいろの人の鼻をみる。エチケットをわきまえない話だが，なかなかたいくつしのぎになるので，ついやってしまう。だんごっぱな，高い鼻，低い鼻，ほそい鼻，上むきの鼻，まだまだほかにもいろいろの鼻がある。

クラスにも，また，かわった鼻がある。鼻の高い人は曽我君，山崎君。鼻の低い人は若尾君。ぶたみたいな愛きょうのある鼻はA君。

C君の鼻をよく観察すると，大きさの割に鼻の穴が大きく，ちょっと上をむいている感じはだんご鼻の仲間であろうか。

北条君のは鼻の割合には穴が小さい。 …(1)

クーリーは，*PI* はまず何よりも「目鼻立ちのぼんやりとした記憶」[5] その他であるとしているが，この例文 (1) は，まさに目鼻立ちについての作文であり，B君がいだく，最も単純な *PI* を列挙したものといえよう。すなわち前節の図式〔1〕の

$$PI_{B\to A},\ PI_{B\to C},\ \cdots\ PI_{B\to N}$$

に例文 (1) は相当する。

さて，*PI* には，単に目鼻立ちにとどまらず，もっと深化されたものも存在しうるわけであるが，E組の児童の国語のノートからは，次のような文章が採集される。これは，「いたわりながら」「ひときわかがやいて」その他のことばに習熟するために彼らが作らされた文章であって，文中の人間の実際の行動の記録であるとは限らない。すなわち[6]，

田中清之助氏は先生だ。 …(2)

けがをした池田君をA君はいたわりながら衛生室へつれていった。 …(3)

僕たちの学級ではいま山田君がひときわかがやいて勉強ができます。 …(4)

僕がレフトを守っていた時，今までレフトに三本もヒットを打ったA君がバッターボックスに入ったので，きっと身がまえた。 …(5)

木下君は給食の時，砂川町の…(未完) …(6)

僕は夢で先生にほめられて目がしらがあつくなった。 …(7)

学校の帰り道，うしろから誰かがついて来るので，なにげなくふりかえってみたら山崎君だった。 …(8)

ソフトのとき，B君が二るいの頭をこえるフライをうった。僕は前進また前進したが，僕がつかんだ時はもう2バウンドもした時だった。 …(9)

A君が，フットベースの時でも頭をこえそうな球が来ると，重い図体を動かして思い切りジャンプしてとるのはあざやかなものです。 …(10)

僕は山できたえた体で千種君とすもうをしたらすぐに勝ってしまった。 …(11)

この間の算数の授業のとき，A君は先生のことをお母さんと呼んだのを考えると，思い出し笑いがとまらなかった。 …(12)

以上の各例文中の人名は全て実在のものである。しかし各例文は国語の練習問題として作られたもので，実際の行動の記録のためにつくられたものではない。各例文には，それぞれの作者がA君，C君その他に対していだくところの，*PI* が表明されている，とみた方がよいであろう。そしてその *PI* は，いずれも例文 (1) にあらわれているものに比べて，はるかに深化されたものである。

しかし，各例文中の人名は，国語のノートに記されている限り，まだ架空の人名であっても一向にさしつかえない。事実，例文 (4) の作者は，一度は記した実在の級友の名をゴムでごしごし消して，「××君がひときわ……」という文章に書きかえてしまっている。

以上の例文は，現実そのものを示したものではない。しかし，A君からすれば，例文 (1) の簡単な *PI* からはじまって，例文 (3) (5) (10) (12) の *PI* が彼に対して集中していることは，事実なのである。すなわち，前節の図式〔2〕

$$\begin{array}{l} B\ (PI_{B\to A})\cdots\cdots\to A \\ C\ (PI_{C\to A})\cdots\cdots\to A \\ D\ (PI_{D\to A})\cdots\cdots\to A \\ \vdots \qquad\qquad\qquad \vdots \\ N\ (PI_{N\to A})\cdots\cdots\to A \end{array}$$

がここに成立している。

さらに，「いたわりながら」「鮮かな」等の言葉からA君が連想され，バッター・ボックスに立てば警戒すべき相手として，先生を「お母さん」と呼ぶような人として，A君が期待され，また例文 (1) の *PI* を級友が共有する故に「ブーチャン」[7]（例文 (13) とする）というアダナで現実に呼びかけられているとすれば，A君の行動には，それらの期待に応えてとられるという側面が，生じてくるであろう。そしてこの段階こそ，前節の図式〔3〕に相当するものである。

A君がそのように行動をとるようになった場合，例文 (1)，(3)，(5)，(10)，(12)，(13) をはじめとする，A君の級友の彼に対する *PI* は，A君の *SLG* と呼ばれてよいであろう[8]。

A君を中心に，クーリーの論理の例証を求めると以上のようになる。図式〔2〕から〔3〕への移行は質的変化であるが，この質的変化を示す例証を，幼稚舎の昭和30年3月卒業生は豊富に残している。さきにふれたように，アダナは，目鼻立ちよりは深く特性をとらえたところの，成員間に普及し共有された *PI* であるが，この年度の卒業記念文集[9]には，アダナに関する作文が多くのせられている。そのなかのひとつをひろうと[10]，

> 僕のあだ名は「富士山」という。僕はすぐ口をとんがらすので，それを横にすると丁度富士山ににているからだ。僕はぶしょうで，のろまで，すぐおこる。人の言う事をよく聞かないし，忘れっぽいし，なまけ者です。　…(14)

という作文がある。文中，下線をほどこした部分に，作者による自分の *SLG* 認知が，それ以降の部分での記述には *SF* が示されているが，例文 (14) の作者にとっては，このアダナは，単なる諸個人の口に上る雑音の総和以上のもの，すなわち，*SF* 形成に重要な意義をもつものであったようである。このほかにも，*SLG* が *SF* 形成に影響をおよぼすことを示す資料は多いが[11]，さらに，アダナを全く念頭に置かずに書かれた作文に現われた *SF* が，アダナと密接な関係をもっていることもしばしばである[12]。

アダナを口にするのは諸個人であるが，そのアダナは当人の *SF* 形成に影響をおよぼす。その過程は無意識的であって，アダナをつけられた当人によっては，アダナの背後の個人が忘れられていることも多い。しかし，その諸個人の「総和以上のもの」の実体は，個人にほかならない。ここで再び33年3月のE組卒業生から資料をかりることにしよう。例文 (1) 中にも登場するC君は，「あだ名」と題して次の作文を書いている[13]。

> 「チクワブ，バンドベースをしようよ」。
>
> 「よし，やろう。ピチなどにはまけないぞ」。変な呼びかたである。
>
> すなわちチクワブこと木下千蔵（ちくら）君とピチのあだ名のぼくのことである。
>
> なぜこんなあだ名がついてしまったのだろう。それは千蔵君の千蔵がちくわにかわり，いつのまにか，ぶがついてしまったのである。
>
> 又ぼくのピチというあだ名もまことに変である。これはぼくの名前の七渡（ななと）がシチトにかわり，三転してピチトになってしまった。…　…(15)

と。このクラスでも，卒業記念文集に級友全員のアダナが公表されたが[14]，しかしその紹介者の日比谷君は，C君を「タヌキオヤジ」（例文 (16) とする）と紹介している。C君のアダナが，あるいはピチであり，あるいはタヌキオヤジであることの意味は何か。それは，ある場合に彼をピチと呼ぶのは木下君であり，ある場合に彼をタヌキオヤジと呼ぶのは日比谷君である，ということにほかならない。

アダナという *SLG* が，諸個人の *PI* をその実体とするものであるからこそ，C君のアダナは，例文 (15) と (16) とのあいだで，相異ったものでありえたのである。

ある人間の *SLG* が同時に2つ以上存在しうるということは，少し時間がずれて同じ現象が生ずれば，*SLG* の変化という結果になる。C君のアダナにも，彼自身の説明によればシチトからピチへの変化があったのである。さらに，C君が例文 (15) を書く1年前に，筆者が行なった調査では，C君は，自分につけられたまた別のアダナ（〝スズ〟）を報告してくれている。

このように急激な変化が，C君の *SLG* について可能であった原因は，その変化の実体が，何ら "mysterious" なものではなく，彼をとりまく諸個人の *PI* の変化という，きわめてありふれた出来事であったことにこそ存するのである。

註

1) 昭和30年調査開始。調査目的は，本稿の論題以外の幾つかの項目にも置かれていた。

2) 現代のように，商品生産が支配的な社会においては，経済的な人間対人間の関係は，商品対貨幣の関係として現象するといわれているのであるか

ら，彼らがどの程度に貨幣を理解しているかは，彼らの経済的人間関係の経験の，ひとつの指標とすることができよう。ところで幼稚舎生の場合には，まず，彼らが商品を生産しそれを販売することによって貨幣を理解する可能性は，ほとんど考えられない。では次に，購買する立場ではどうであろうか。そこで，E組の調査を開始する直前に，K組全員に「100円札を10枚もらったらどうするか」という作文を書いてもらったところ，

A　貨幣をある程度理解している者　…11名
B　貨幣の経済的意味をほとんど理解していない者　…35名

という結果が得られた。「B」に分類される者が「A」に比べて圧倒的に多いということは，このクラスの多数は，高学年になってからも，購買者としての経済的人間関係をあまり経験していないことを，物語ると解してよいであろう。

その内訳は，〔A〕理解者：(イ)，1,000円で可能な用途を示した者＝7（玉川，水谷，上田，大沢，原田，岡本，壺井），(ロ)，明確な目的をもって貯蓄する者＝4（堤，鹿野，村松，松平）。〔B〕非理解者：(ハ)，用途合計が1,000円を上まわる者＝12（大岩，井上，関口，三井，伊東，田島，藤田，中浦，篠原，石原，花八，秋本），(ニ)，明確な目的なしに貯蓄する者＝17（森，中村，中山，小塚，鈴木，沢田，鹿内，一寸木，前島，横河，加藤，椎橋，伊丹，戸張，白石，栗林，梅沢，），(ホ)，他人にやってしまう者＝6（上野，村上，橋本，田中，木村，藤岡）であった。

なお(イ)に分類したものにも，玉川君のように購買物の単価まで明記するものから，「後楽園遊園地でうんと三百円ぐらい使い，残りはアイススケート」（壺井君）等，着想は(ハ)に近いが，用途合計が偶然1,000円以内におさまっているものまでがある。

(ハ)には，「千円で池を作って，ひめますを入れて飼います。そいで，金ためて池ひろげて，いろいろな魚いけに飼って，食べます」（大岩君）をはじめ，「祖母には上等のおびどめと良いぞうり，母には，鏡とよくつりあった，鏡の下に置く机といす」（秋本君）など，はじめから1,000円では不可能な用途を示すものから，購買予定の個々は妥当であるが合計が1,000円を上まわる（ソフトボール，バット，映画見物，流行歌の本—伊東君）もの，「まず六百円はぼくがもらって四百円はお母さまにあげ」，〝ボク〟の予算は妥当ながら〝ママ〟の予算に問題があるもの（田島君）までが含まれる。母親の治療費にむけるもの（井上君）も(ニ)に含めた。購買物を経済関係の上でよりは使用の対象としてみることが彼らには多く，「私は花を育てることが好きなのです。だからママが，『由利子はこのごろ……』」云々から花壇作りへ進む（花八君）ような発想も多かった。

(ロ)はラッキー定期（鹿野君）や郵便貯金（村松，松平君）に積立て，「六年生になったらラジオを作る」（堤君）というようなものであるが，これと対照的なのが(ニ)である。

(ニ)は，「百円おはじき買って，あとの九百円は，カンに入れて上からセロテープでぐるぐる巻きにして，その上から油紙でぐるぐる巻きにして，その上からどんどん油をかけて，それから木の箱に入れて，それを火であぶって少しこがして，土の中に入れておく」（梅沢君）との作文に代表される。意志決定に際し，一貯金—本—玩具—本—貯金—と逡巡する者（前島君），「とにかく僕はムダヅカイしたくない」（横河君）を動機とする者が多く，その目的も「大きくなったらなにかの役にたつこともあるでしょう」（椎橋君）というほどのものである。

(ホ)には，両親に誕生日やクリスマスのお祝いをあげるもの（田中，木村君），貧乏な人や目の悪い人にやったり「赤い羽根」を買ったりするもの（上野，村上，橋本君），「幼稚舎にきふする」（藤岡君）ものを含めた。

なお，この予備調査は，「100円札を1枚もらったら…」，「1,000円札を1枚もらったら…」をそれぞれの課題とする2群について施行されるはずであったが，担任教員との連絡不徹底から，全員に「100円札10枚…」の課題で作文を書いてもらうことになってしまった。しかし，この手ちがいのおかげで，彼らの多くは100円札10枚と1,000円札1枚とに異なる意味をもたせていることが分かった。あるいは「うちで千円さつと，とっかえて，大事に大人になるまでとっておく」（中村賢君），あるいは「その百円（札）を銀行に持っていって，一円札千枚ととりかえてもらいます」（水谷君）などの文章が，数多くみられた。彼らは貨幣を一種の宝物と考えており，それを，経済的関係のうえで理解することができないのである。

3) このクラスのソシオグラムをつくってみると，B君は，特にステータスが高くも低くもないことがわかる。B君は，本名を中村章君という。

4) 慶応義塾幼稚舎，〝仔馬〟，Vol. 9, No. 5. なお，文中のA君，C君について，〝仔馬〟では，それぞれ川端君，鈴木君という，本名があげられている。

5) C. H. Cooley, "Human Nature and the Social Order," 再版，p. 104.

6) 例文 (2)～(6) は大原清明君作，(7)～(12) は梅浦邦久君作。

7) 日比谷孟俊君の作文による。「仔馬」，Vol. 9, No. 6.

8) 例文 (1)～(13) の諸 *PI* は，川端君の *SLG* となる可能性はもつが，必然的に *SLG* に転化するわけではない。川端君の *SLG* の現実化は，彼が諸 *PI* とどのように交互作用を営むかにかかっている。

9) 「仔馬」，Vol. 6, No. 6. 以下引用の諸例文は，ク

ーリーの論理の上で，比較的現実に近い段階を例証するためのものである。一般に，ある理論が現実に近づけば近づくほど，それ以外の法則の作用の影響を考慮に入れなければならなくなる。以下の諸例文についても，それぞれの作者の動機が，クーリーの説明するような側面だけであったとは考えることができないことは，いうまでもないであろう。

10) 牛山君の作文による。(ibid.)

11) 資料所存のみ示すと，友利，西郷，鈴木，荒木，諸戸，中村（庄），八田，大島，入江，内垣，柴田，神野，吉村，伊沢の諸君の作文。(ibid.)

12) 同文集では，古野，海野，伊沢，中西，西山，近藤，三野，関根の諸君が，分担して全卒業生のアダナを紹介している。一方，全卒業生がそれぞれ幼稚舎生活を回想しているが，両者を比較してみると面白い。たとえば，峰岸君はオバサンというアダナを持っているが，このアダナについてその紹介文は，「いわく因縁はというと，低学年の時，クラスの中をグループに分けこれにお父さんお母さん」を置いたが「ちょうど峰岸君のグループに女生徒がいなかったため，先生が峰岸君をお母さんに任命した所から来る」と説明している。一方その峰岸君は，3年生のグループ学習中でのできごとについて，「…三四人で出発した。有栖川公園の横の道を入ったが，変な道に入りこんでしまって社会科の調べどころではなくなった。道をさがすのに一しょうけんめいだった。何とか古川橋あたりの電車道に出た。電車に乗ろうとしたが，その時誰一人としてお金を持っている人がなかった。…」云々と，作文を書いている。このとき，彼はかなり母親的ロールを演じたらしいが，諸他の条件もさることながら，中学年での彼のこの行動は，低学年で形成された *SLG* と無関係ではないであろう。この他，類似の読み比べを，アダナ紹介文との間に行なうことができる作文としては，「森のいたずら」（李家君），「幼稚舎生の欠点」（仲井君），「大人になったら」（羽山君），「けんかと涙」（太田君），「幼稚舎生活の一日」（田阪君），「入学いろいろ」（星野君），「大人になったら」（大串君），「大人になったら」（松方君）がある。(ibid.)

13) 「仔馬」，Vol. 8, No. 5.

14) 「仔馬」，Vol. 9, No. 6.

（4）

社会の実体が個人以外の何物でもないということは，社会進歩と個人の自由とに，重要な関係をもってくる。もし，*SLG* が金属製の鏡と同じような一つの実体をもつものであるとすれば，ある人間に対する社会的評価は，その社会が全面的に破壊されでもしないかぎり，永久に改められないかもしれない。しかし，事実はそのようなものではない。再三説明したように，クーリーの概念としての *SLG* の実体は，個々の人間であり，その個々は *SLG* に包まれる者と，何ら変らぬ存在なのである。

従って，*SLG* に包まれた者は，彼をとりまく人間と1対1の対応をすることができ，その場合には，彼が彼らの *PI* を変化させることも不可能ではない。つまり，受容し難い *SLG* は，受容しうるものに改造できるのである。今や彼に可能な行為は，*SLG* の示す期待を，天与の役割りとして取得することだけではなくなってくる。さきの例文の作者であるC君も，同じ作文中で[1]，

もしあだ名をいやがる人があれば，遠りょなく云って出てもらい，なるべくよばないように申合わせている。

と書いているが，アダナは変革しうるものというC君の認識は，誤っていないであろう。しかも，実際に「そういう人も二年のころは沢山いた」のであり，そのたびに「そういう人」に関して周園がいだく *PI* は改められてきたのであった。

しかし，*PI* 個々の変革だけから *SLG* の変革をはかるのは，至難の業であろう。根本的な *SLG* の変革のためには，それを構成する個々の鏡の，配置を変えなければならない。クーリーは，諸個人の組織のされかたがこのように変革されていくことこそ，社会の「進歩」(Progress)[2] であると考えている。すなわち，「自由は進歩の個人的側面」[3] なのである。彼は「人間性と社会秩序」最終章で「自由」の問題を扱っているが，そこでは，特にこの進歩の反面としての自由に重点が置かれている。ただし，彼のいう社会の進歩とは，社会構造の複雑化という意味であることを，念頭に置かなければならない[4]。

だが，「そのことは，あらゆる複雑な社会秩序が自由だという意味では決してない」[5] のであり，過去の「複雑な社会秩序」には，ローマ帝国のような自由なきものが存在していたことを彼は指摘している。また，この書の著された1902年当時にすら，「ロシア帝国や清国の如き巨大かつ複雑な帝国は，最も未開な英国植民地ほどにも自由ではない」[6] と彼はいう。彼は当時のアメリカに限って，「複雑化は自由と相反するものではない」[7] と認めるのである。

しかもクーリーは，その合衆国的社会についてさえ，「自由は，一度獲得すればそれかぎりいつまでも保持できるような，固定したものではないのであるから，どんな社会も，すなわちわれわれの社会さえも，必ず一部は

自由で一部は自由でないと認められる」[8] としている。そして全体の結論部で，「現状の民主主義にはそれなりの諸欠点がある」[9] とまでのべている。

彼の自由観を要約すると，進歩（*SLG* の体系の変革）と自由は表裏の関係にあり，かつ，特定の社会（いわゆる合衆国的社会）では，進歩は社会組織の複雑化を意味する，ということである。この「特定の社会」という時間的制約をその論理の妥当範囲に課している点に，われわれは彼の歴史的な問題意識を認めることができる。

さて，クーリー理論を教育に応用する場合にも，彼のこのような自由観と，それにともなう彼の論理の時間的制約性が理解されていなければならない。

彼は，「人間性と社会秩序」の最終章で，「訓育（discipline）に関していえば，自由とは訓育しないことではない。低級な非合理的訓育とは異なる，高級な合理的訓育が加えられることである。Free discipline は，諸個人の理性と良心，従ってまたその自尊心に訴えて，統制していくものである」[10] とのべている。いうまでもなく，自由は訓育を排除するものではない。しかし，彼のいうような free discipline が，あらゆる時代に存在することはできないはずである。訓育に関する，彼による一連の記述は，その著作の最終章で，基礎理論の「合衆国的」社会への応用の段階で記されていることに，注意することが必要であろう。

一方またクーリーは，「社会組織」と題する別著では，primary group のなかで形成され，かつそれを人びとが「常に社会制度に応用するような，愛，自由，正義等々に関する知識」[11] を，primary ideals と呼んでいる。この primary ideals について，彼は，それが primary group のなかで形成されるということまでは，あらゆる時代について主張している。しかし，どのような primary ideals が形成されるかについては，「人種により，文化の一般状態により，またはそこに存すべき特殊の制度によって，著しい相異を示す」と考えている[12]。

この両著にあらわれた 2 つの考え方，すなわち，「人間性と社会秩序」における free discipline 概念と，「社会組織」における primary ideals 形成の理論とのあいだの類似性は，少し注意して読む者の誰しもが気付くところであろう。そこで，やや図式的ではあるが，free discipline とは，クーリー時代の合衆国的社会で行なわれるべき，理想的な primary ideals 形成のことである，と理解してよいのではなかろうか。

すなわち，——社会の変革（クーリーの場合，その経済的側面が捨象されているとはいえ）に裏づけられた free discipline——，これこそ，当時のアメリカ社会に対する，クーリーの社会理論の教育面での応用なのであった。

Free discipline という，クーリーの教育面での主張は，個の全体への没入の主張と，本来相容れるものではない。そのような free discipline の主張を彼がなしえたのは，彼が自由を社会進歩の反面としてとらえていたからであり，社会の進歩ないしは社会の変革を彼が認めることができたのは，彼が社会の実体が諸個人であることを知っていたからである。そして彼が，——社会は単なる個人の総和以上のものとしての意義をもつところの組織体ではあるが，しかしその実体は諸個人である——ということを明らかにしているのが，図式〔2〕から〔3〕への，彼の論理の展開なのであった。

註

1) 「仔馬」，Vol. 8, No. 5.
2) Cooley, "Human Nature and the Social Order," 再版，p. 425.
3) ibid., p. 425.
4) クーリーは，第 1 章の自問自答で，「他と協力して働く組織的自由」(ibid., pp. 49—50) という表現をとっているが，この表現の真意も，社会構造の復雑化ということなのであろう。
5) Cooley, ibid.,, p. 429.
6) ibid., p. 429.
7) ibid., p. 429.
8) ibid., p. 430.
9) ibid., p. 433.
10) ibid., p. 426.
11) Cooley, "Social Organization," p. 32.
12) ibid., pp. 32—3. この部分を精読すると，彼が，primary group の対面集団という形式があらゆる社会に存在することは認めていたが，その内容としての primary ideals については，きわめてきびしい時間的制限を課していることが分かる。

（5）

クーリーの理論が，このように，個人の自由を広く認めるものであるにもかかわらず，なお実際には，個の全体に対する順応の主張の裏づけに，彼の発言が利用されることがあるのは，なぜであろうか。その原因は，2 つあるように思われる。その 2 原因については，本稿のはじめにも，一般的な表現でふれておいたが，ここでは，いますこし具体的に説明を加えてみよう。

クーリーの個と全との関係についての見解が，正しく理解されないことの第 1 の原因は，最初にも指摘したよ

うに，彼による実在論と名目論との対立の止揚が，彼の論理に即して解明されていない[1]ことにあるであろう。いかに口先だけでクーリーにおける実在論と名目論との対立の止揚を認めても，図式〔2〕から〔3〕への展開が理解できないかぎり，実際には，クーリーの個と全との関係についての見解が，全く理解できていないのと同じである。クーリーの論理構造が理解できていない研究者ならば，良心の呵責なく，クーリーの発言の断片的引用によって，個の全体に対する順応を説くこともできるであろう。

クーリー理論が，個の全体への順応の主張の裏づけと化することの，第2の原因は，クーリーの一般的論述と，特殊な社会についての論述とが，しばしば混同されていることに存する。1例をとってみよう。

さきにのべたように，primary ideals の内容は，各時代のそれぞれの社会ごとに，異なるものとされている。そしてクーリーは，当時の合衆国的な社会について，primary ideals の主要な構成要素として，loyalty, lawfulness, freedom をあげている[2]。クーリーのこの部分の記述は，特定の社会についての，いわば特称肯定判断である。すなわち社会によっては，クーリーが例示する場合とはまさに逆に，primary group のなかにあって，その集団に対する憎悪と反逆心が形成されるのを常とするような場合さえも存在しえよう。所が，もし超時間的にクーリーの所説を継承すると，彼の特称肯定判断は，――社会の如何や時代の如何にかかわらず，全ての loyalty, lawfulness が primary ideals である――という，全称肯定判断に変ってしまうであろう。

次に，この primary ideals を「社会進歩の原動力であり証左である」[3]とみなすクーリーは，「primary ideals は民主主義とクリスチャン精神の底にひそむものである」[4]といっている。この命題も，時間的限定をともなう，特定社会についての特称肯定判断である。そしてこれもまた，超時間的観点に立つことによれば，全称肯定判断に換えることができる。

クーリーが持っていたのは，2つの特称肯定判断であった。この2つの前提を組合わせて推理を試みようとする意図も，彼は特に持っていなかったようである[5]。

しかしこの2つを超時間的な観点から全称肯定判断に書きかえると，もっとも簡単な三段論法が可能となる。すなわち，――全ての primary ideals は民主主義の基礎である。――全て社会に忠誠をつくすことを，primary ideals という。――よって，全て社会に忠誠をつくすことは，民主主義の基礎である。――という推理になる。いかにも奇妙な結論である。忠誠をつくすべき社会が反民主主義的なものであった場合には，民主主義の基礎は，反民主主義のため忠誠をつくすことであるという，大変に矛盾したものになってしまうのが，この結論である。さすがにこの最後の結論までを口にした学者は知られていないが，この推理の前提となった全称肯定判断のいずれか一方を，クーリーの名によってひろめつつある学者は数限りない[6]。

クーリーの理論が，実在論的に解釈されていく過程は，おもに以上の2つの契機にはじまる。本稿で最初にのべたように，クーリーの論理構造の無視と，クーリー理論の実在論化とは，たがいに無関係ではなかったのである。

クーリーの理論を，それが主張された社会的背景を無視して採りいれると，かえって彼の真意にそむく結果になるというこの事情には，特に注意が払われなければならない。ことにクーリーの社会理論を教育の見地から学びとろうとするときには，たまたま彼が当時のアメリカ社会に即して具体的発言を相当程度に行なっているだけに，かえって彼の真意を誤読する危険も多い。

さきに引用した，社会科指導要領執筆者の言をかりるまでもなく，個人と社会との関係は，ひとり社会学の問題であるにとどまらず，教育学の問題でもある。そして，日本の教育実践が，クーリーから，その基本的考え方を学ぶのは，よいことであろう。クーリーによる，図式〔2〕から〔3〕への展開をふまえた実在論と名目論の止揚は，アメリカ以外の諸国の教育実践にも，適用しうるものである。すなわち，単なる抽象理論ではなく，一定の条件下では教育の現場から例証をうることができるような，〝個人と社会〟の関係に関する彼の発言は，それが抽象度の高いいわば基礎理論であるという限界を意識したうえで，日本の教育界はうけいれることができる。

しかし，クーリーが当時のアメリカ社会について行なった具体的発言を，そのまま現在の日本社会の教育現象にあてはめることはできない。わが国のなかでの具体的な事例については，彼の基本的な考えかた，すなわち，――社会は単なる個人の集合以上の意義をもつ，――しかし社会の実体は個人であって，それ以外の何物でもない――，という見地をもとにして，さらに，個々の場合に即して，日本の社会構造の特殊性をも考慮に入れた解決が計られなければならないであろう。

クーリーの所説のうち，何が一般性をもつものであり，何が時間的制約をもつものであるかの区別を忘れる

と，かえって，クーリーの本意とは，にてもにつかぬ主張が展開されるおそれが，なきにしもあらずなのでる。

註

1) クーリーの甥である Robert Cooley Angel が著した "Introductory Sociology" においてさえ，図式〔2〕から〔3〕への展開が，全く気づかれていない。
2) Cooley, "Social Organization," p. 38.
3) ibid., p. 32.
4) ibid., p. 51.
5) 2つの特称肯定判断からは，本来は推理を行なうことができない。しかしこの場合の媒概念の実際からすれば，この場合には，強いて行なえば結論を得ることができる。
6) R. C. Angel, op. cit., pp. 60—69 さえも，primary ideals の構成要素に関する規定を超時間的に継承している。同書は，エンゼルが伯父の文章を編して 1933 年に発行したもので，primary ideals に関する記述も，伯父の 1909 年の文章がそのまま採録されている。しかし primary ideals はクーリーによれば，「改造され改廃さるべきもの」(Social Organization, p. 33.) である。従って，エンゼルは，伯父の文章に忠実であろうとすればするほど，伯父が明治末年のアメリカ社会について発言したことを，昭和の初期の状態にまであてはめようと試みることになり，かえって，彼は，時間的制約性をもつ伯父の理論に不忠実な結果をもたならしてしまっているのである。

付記——本稿の主要部分は，昭和33年に稿されたものである。